

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## イタリア民話の世界⑤

### イタリア民話の旅 番外編

剣持 弘子

#### ●このシリーズの意図

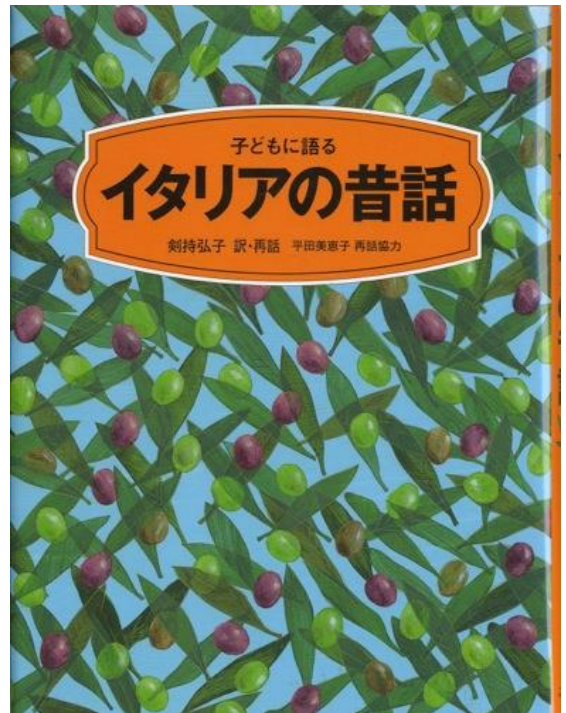
前回まで4回にわたって「イタリア民話の旅」の報告をしてきました。この旅はまだまだ続きますが、今回はひとまず中断して、このシリーズをはじめた意図をはっきりお伝えすることにします。

私はかれこれ半世紀にわたって、イタリアの昔話の資料を集め、それを絵本や子ども向け読み物、あるいは大人向けの昔話集などさまざまな形でお届けする仕事をしてきました。また、イタリアの昔話と日本の昔話を中心に据えて、さまざまな視点で論文も書いてきました。昔話の世界は、私が半生をかけて付き合ってきた、なお飽きることのない世界でした。まだまだ未開拓の部分も沢山あり、さらにこれに挑むことを老後の楽しみにしていました。ところが、いつのまにか年を取っていて、もう老後はあまり残されていないことに気がついたのです。というわけで、私は今まで集めてきた資料をゆくゆく託せる人を探すことにしました。受け継いでくださる人には、資料の活用について、できる限りのお手伝いもしたいと思っています。そこで今回は、参考になればと、私がこの道に進むようになった経緯からお話することにしました。

#### ●イタリア民話との出会い

私は、今の仕事にたどり着くまでに、いろいろ事情があって、さまざまな寄り道をしてきました。ごく簡単に言えば、高校を出たあと、会社勤めを経て進学し、卒業後、栄養士として仕事をしてから結婚しまし

た。栄養と料理を学んだのも、それなりの深慮遠謀があったのですが、それは省略します。



【子どもに語るイタリアの昔話】

その後、子育てをしながら、生涯つづける仕事を模索している時、戦後の新しい子どもの本に出会ったのです。私の子どもの頃に比べて、なんと豊かな世界がひろがっていたことでしょう。とくに海外の児童書の豊かさには圧倒されました。もし、子どもの頃にこんな本たちに出会っていたら・・・と羨望の念

を禁じませんでした。次々と子どもに読んでやりながら本の世界に浸り、しばらく至福のときを過ごしました。その後、地域で文庫活動をはじめの機会があり、さらに子どもの本との縁はひろがりました。

子どもの本に抱いた興味を活かすべく、まず児童文学を勉強することにし、英語以外に外国語を学びたいと考えてイタリア語を選びました。

こうして、イタリアの児童文学に近づき、分け入っていきましたが、残念ながら、イタリアには研究したいというほどの児童文学はみつかりませんでした。戦前の『ピノッキオの冒険』も『クオレ』も、紹介、研究し尽くされた感がありましたし、戦後の作家、ジャンニ・ロダリーはイタリア唯一の国際アンデルセン賞受賞作家だけに魅力はありましたが、子ども向けに書かれたものは、すでに安藤美紀夫氏によってほぼ訳されてしまっていました。その後のロダリーの作品の独特のファンタジーは魅力的ではありましたが、私の求める児童文学の範疇を少し越えていました。その後、イタリアでも子どもの本は沢山出ましたが、ヨーロッパの、特に北の方の国々の作品に比べると、今一つ魅力に欠け、軽すぎるように思われました。

そんなとき当時のイタリアの児童文学の翻訳、研究の第一人者、安藤美紀夫先生とじかに接する機会に恵まれました。

きっかけは朝日カルチャーセンターの講座でした。その講座は「児童文学と民話」というものでしたが、そのときはまだ特に民話に関心がなかったので、児童文学の安藤先生の名前に惹かれて受講することにしたのです。

この講座は、児童文学と民話の講義が1週おきに組まれていて、民話の講師は、当時日本女子大教授だった小澤俊夫先生でした。

安藤先生の児童文学の講義は期待通りでしたが、当時の私にとっては未知の世界ではありませんでした。それに対してもう一方の小澤先生の講義は、それまで民話の知識がなかっただけに新鮮で、たちまち引き込まれました。

「桃太郎」「花咲翁」といった日本の昔話も、「赤頭巾」「白雪姫」といったグリム童話も、同様に民話の範疇に入ることがはっきり理解できました。さらに、『ピノッキオ』にもロダリーの作品にも、民話への視線があることも思い出させてくれました。ここで、児童文学と民話が、私の中で繋がったのです。

その後、小澤先生の昔話研究会創設に誘っていただき、基礎から勉強する機会に恵まれました。研究会では民話を研究する意味と方法をたたき込まれ、必死に食いついていきました。安藤先生には、その後翻訳の仕事をお願いしていただく機会がありましたが、残念ながら先生は1990年に60歳で早世されました。



【カンパーニア地方の民話集】

あらためて民話とは何か？一言でいえば名もない民衆の間で生まれた物語だということができるでしょう。それについてはこのシリーズの第一回(2014年9月号)で、簡単にまとめておきましたので、見ていただくとありがたいです。

ところで、私は民話を勉強するうち、ヨーロッパで最も古い民話集がイタリアにあったと知ったのです。それは、次の2作品です。この二つについては、すでにあちこちで紹介されているので、ここでは詳しくは書きませんが、どちらも重要な民話集です。

1、『楽しい夜』1550～1552(ジョヴァン・フランチェスコ・ストラパローラ)

ヨーロッパで最も古い昔話集です。梓物語と言っ

て、大きな枠をなす物語の中に、いくつかの物語を収めるという形式をもっています。

## 2、『ペンタメローネ』1634～1636 (ジャン・バティスト・バジーレ)

ボッカッチョの『デカメロン(デカメローネ)』が『十日物語』であるように、『ペンタメローネ』は『五日物語』のことで、5 日間に 10 話ずつ語られるという、やはり枠物語になっています。

他の国では、17 世紀の末にフランスで『ペロー童話集』、さらに 19 世紀にはドイツで『グリム童話集』が出ました。グリム兄弟は研究者として、民間で語られていた昔話を集める運動をはじめましたが、その運動は他のヨーロッパの国々にもひろがりました。

イタリアでも、シチリアやトスカーナ、アブルッツォなどを中心にひろがり、この時期多くの民話集が編まれました。研究者によって集められたそれらの資料をもとに、1956 年、イタロ・カルヴィーノが『イタリア民話集』を編みました。日本では、岩波文庫から『イタリア民話集上・下』として 1984・5 年に翻訳紹介されましたが、カルヴィーノが編んだ 200 話のうち、約3分の1が紹介されるにとどまっています。その後、イタリアではカルヴィーノに刺激されたかのように、第二次の収集・研究の波が起きて、次々に新しい民話集が出版されました。資料がふえ、楽しみが増えています。

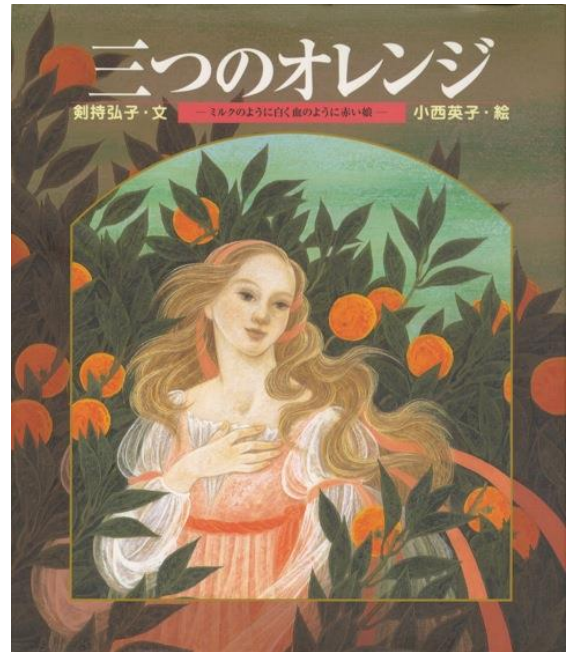
古典に恵まれ、また、地理的、社会的状況を反映して、イタリアは長い間豊かな民話を語り継いできました。まだまだ紹介されることを待っている話は沢山あります。ヨーロッパの他の国々、それに日本をはじめとするアジアの国々、日本とヨーロッパをつなぐ中近東の国々の民話を比較する研究もまだ始まったばかりです。

ところで、私はイタリア民話を研究し、仕事にできるようになってから、さまざまな出会いとチャンスに恵まれてきました。でも、決して運がよかったということではないでしょう。常に準備をし、一歩前に入る勇気があったのだと思っています。次回からそういうこともご報告していきたいと思っています。

これから綴る私の経験が少しでも参考になれば幸いです。イタリア民話の世界に足を踏み入れてみませんか？興味を持たれた方はご連絡ください。

次回からまた民話を訪ねる旅にもどり【お話コーナー】も続けます。

(イタリア民話研究家)



【絵本『三つのオレンジ』(イタリアの代表的民話)】

### イタリア語 無料体験レッスン

まったく初めての方向けです。事前予約制。

- 京都本校: 日本イタリア会館  
3/30(水) 11:00～12:30  
4/ 2(土) 11:00～12:30
- 四条烏丸: ウイングス京都  
3/29(火) 19:00～20:30
- 梅田: 大阪駅前第4ビル  
3/28(月) 11:00～12:30  
4/ 1(金) 19:00～20:30

### スペイン語 無料体験レッスン

- 京都本校: 日本イタリア会館  
4/ 2(土) 11:00～12:30



## 『ローマと美術④』

### ローマで双子育児

浅田 朋子

2014年にローマで産まれた双子の娘たちは、病気も怪我もなく元気に育ち1歳4ヶ月になった。

1歳を過ぎたあたりから急に成長し、いろんな事ができるようになった。階段を上るように少しずつできるようになるのではなく、ある日を境に今までできなかったことを突然やってのける。

靴を履いて上手く歩けるようになったので散歩も楽しそう。自分たちの意思で外を歩き回れるのが嬉しくてしかたない様子。でもまだまだ長い距離は歩けないので公園までベビーカーにのせていきたいのだが、どういうわけか双子はベビーカーが好きでない。私は一日中でもベビーカーにのってぼーとしていたが、二人はそうではないらしい。ベビーカーに乗らず勝手に歩き回る双子を連れて歩くのは大変なので、散歩にはいつも義両親のどちらかがつきあってくれる。

我が家のすぐそばに、子供を散歩させるのにちょうどいい公園がある。近所の老人たちの憩いの場でもある。イタリアにしてはいつもきれいに掃除されていて環境もいいので、子供を散歩させている人が多い。

ある日、義父といつものように公園で双子を散歩させていると、向かいからベビーカーに子供をのせた私と同世代、40歳くらいのお母さんが双子に手を振ってきた。

「チャオー！ あらあ、すごいわねえ～。こんなに小さいのに、もう歩いて散歩してるの？」といわれたので「小さく見えますが、もう1歳4ヶ月なんです。」といった。「えっ？ 1歳4ヶ月でもうこんなに歩くの?!」とさらに驚いていた。そうか？ 普通ちゃうの？ と思いつつ、相手の子供を見て驚いた。4、5歳だろうか、ベビーカーから体がはみだしている。不機嫌そうなこの男の子、ぴかぴかの高そうな靴を履いてお菓子を食べながらベビーカーの中でふんぞりかえっている。「うちの子、ベビーカーが大好きで、歩くの嫌がるのよ～」と言いながら去っていった。

「ちょっと、何あれ、びっくりするわ。あの子まだベビーカーにのってんで！ あの履いてる靴は飾りか？」と義父にいうと、「最近、イタリアではあれくらいの歳までベビーカーにのってる子供が多いなあ。歩き回られるより、ベビーカーに物みたいののせて連れ歩く方が楽なんだろう」という。気になって散歩以外にも周りの子供を見てみると、5歳くらいまで子供をベビーカーにのせている親を結構見かけた。ベビーカーにのせて移動しなければならぬ理由がありそうな子供たちではない。子供はベビーカーの上で足を組んだりお菓子を食べたりしている。親はというと、友達や知り合いとどうでもいいような話をだらだらしている。どっちもどっちである。一番大きい子で6歳でベビーカーにのっていた。日本では歩けるようになれば、歩くのに疲れたらせる為や危険な場所を通る場合などに補助的にベビーカーを使う親が多いのではないだろうか。しかしそれも3歳くらいまでで、私は日本でこんな歳までベビーカーにのっている子を見た事がない。元保育士であった母親に言うところ「…ありえへん。」と言葉を失っていた。



【仲良く散歩】

子供が少しずつ自分で身の回りの事を一人できるようにしていくのが普通のしつけだと思うのだが、

イタリアは「マンマ」がぜーんぶやってしまう。「自分でさせないの？」と聞くと「だってこっちがやった方がはやいから」と言われた。

例えば食事。子供が食事に興味をもちはじめたら手づかみ食べ、そしてスプーンやフォークをもたせて徐々に一人で食べられるように練習させていく。でも私の知り合いのイタリア人の母親は汚れるのを嫌がって、きちんと食べられる年齢までスプーンで食事を与えていた。確かにひとり食べをはじめると恐ろしいほど服やまわりは汚れるので簡単に早く食事を済ませたいその気持ちはすぐわかるが、子供にとってどうなのだろうか。自分でできる喜びや達成感を味わう事は、子供にとって、とても重要なことだと思う。

イタリアのテレビ番組で「S.O.S. TATA」というものがある。子供の教育やしつけで悩む母親が番組に応募し、その家庭に幼児カウンセラーが訪問して数日間で子供のしつけの仕方を母親に伝授する、というものである。

この番組に登場する家族がこれまた驚きなのである。子供は5歳と7歳の兄弟。母親は朝起きてから子供たちが寝るまで、もう何もかも子供の身の回りの事をやるのである。靴下を履かせ、服を着せ、食事の用意も目の前までだし、「嫌い」といわれれば違うクッキーを与え、鞆に教科書を入れて登校準備、その鞆を子供が持つのかと思いきや母親が持ち、車に乗って学校へ。下校の時間にまた母親が鞆を持ち、車に乗せて帰宅。宿題は一人ではしない。母親がつきっきりで一緒にやる。お風呂も母親と一緒にいれて髪をあらひ、乾かし、服を着せる。夕食までテレビゲームで一人遊ぶ。あ、これはひとりでできるんだ…。夕食は呼ばれても食卓にいかないで母親が連れてきて着席。食事後は歯磨きを母親がして、ベッドまで手をつないで行き、ねかしつけ、就寝。あれ、子供たち朝からなんか自分たちでしてたっけ？まるで新生児のようである。

当然カウンセラーからこの母親にダメ出しだらけだったが、「自分でやらせるように」と強くいっていたのは宿題くらいで、他の事を自発的にやらせるようには言っていなかった。こちらでは「ある程度の歳まで母親が手伝ってやる」という日本人的な常識を覆させられる。

この家族の例はあまりにも子供が何もやらなさすぎて極端であるが、大体こんな感じで子供の身の回

りの事をイタリア人の母親はやっている。だから何歳になってもイタリアの子供の「母親に依存」ぶりがすごい。「なんでもやってくれる母親」を一生続けなくてはいけないイタリアのマンマは大変である。まあ、そういう風に育てたのは母親なのだが…。

さて、こんな風だから、こちらで「ママ友」をつくる気にもなれない。皆がこうとは思わないが、公園で母親を観察する限り「ああ～、友達にはなれんな」と思うのである。ただ、母親同士で情報を交換できたりできないのは、ちょっと残念である。

が、こんな私でも「ママ友」とよべる母親が一人だけいる。同じマンションに住むロシア人のレーナである。なんと私が出産した一週後に彼女も双子の男の子を出産したのである。夫はイタリア人で、イタリアに来た時期も、結婚した時期も一緒と、まさに運命の出会い！親友になる要素満載なのだが、そんなに親密でもない。私はものぐさなので、メールとかのやり取りも本当に友達にならないとできない。さらにメールを、それもイタリア語でわざわざかくなんで「面倒くさくて子育ての最中に書いてられんわ！」とってしまう。だからレーナが連絡をくれて、やっと重い腰をあげ、4階の我が家から2階の彼女のお宅へ遊びにいくな事が多い。

彼女の息子たちは、とても体が大きい。がっしりした体に、赤毛の青い目で強面である。大きな手のひらは哺乳瓶も握りつぶしそうである。義父は「すでにロシア戦士だな。将来のスパイ候補だ」などと真剣な顔して言っていた。少女のように小さく華奢でかわいらしい外見の彼女から、この巨大な双子が産まれてきたとは到底思えない。3人並んで座るとなんか兄弟みたいである。

ところがこの双子、見た目は戦士なのだが、弱々しいのである。ハイハイの時期、「なんかね、すぐ疲れてハイハイやめるの。腕の力が弱いのだ」と言って彼女はため息をついていた。私は彼らのぶつと腕を握り「ほふく前進、前へ、進め！」と喝をいれてみたが、プイと迷惑そうに横をむいた。たしかにわが家の娘たちに比べて腕は太いが、ふにゃふにゃで筋肉がない。お座りしていてもしばらくするとだら～と崩れて寝転ぶ。最近は上手に歩けるようになったので公園を少し歩き回っているが、基本はベビーカーにのんびりのって、おしゃぶりをしながらうとうとしているのが大好きなのである。おい、しっかりしろ、戦士たち！

そんな弱小部隊を連れて彼女はせっせとお出かけし、山や海に連れて行き、自然の中で大いに遊ばせ、赤身肉をたっぷり食べさせても、あい変わらず弱いままである。

「イタリアの子育てはなまぬるくてどうかと思う。ロシアのやり方でロシア人として強くたくましくそだてたい！」ゆえ、頻繁にロシアにも連れて帰り、毎日ロシア語で話しロシアの子供番組を見せていても、「簡単なロシア語さえ、ぜんぜん分かってる様子がないし、ロシアにいると不機嫌なの」と嘆いていた。まだまだ精鋭部隊までの道のりは険しそうである。

母親にいろんな思いはあるが、そうは上手くいかないのが子育てだ。子育ての理想と現実の狭間でもがいて「お母さんだって一日中寝ていたい。私

も誰かにご飯食べさせて欲しいよ！」と叫んでおかしくなりそうな時期も乗り越えて、子育てという一生の仕事を全うしなければならないのだ。

とにかく、私の母が言うように「親が一生懸命子育てしていたら、子供はちゃんとそれを感じてきちんと育つ」のだと信じて日々がんばるしかない。

ところで、現在、双子戦士はまたまたロシアへ帰還中である。義父いわく「そろそろ武器を調達しにくい時期」らしい。その武器、上手く使いこなせる腕力をつけていればいいが…。

(元当館受講生)

## イタリアンレストラン紹介 ～肥後橋～

### BUONA FORCHETTA イタリアン&ナポリピッツア

くぬぎの薪を使った石窯でナポリピッツア。旬の野菜、旬の魚、大山鶏等を焼き上げる南イタリア料理。

ボリュームたっぷりのアンティパスト、種類豊富なブリモピアット(パスタ)、カジュアルに南イタリア気分で楽しく食事出来る空間を楽しんで頂けます。

地下に8名～14名様までの貸し切りスペースとフリードリンク付きコースもご用意しております。

特典:1ドリンクサービス(3月末まで)  
(赤白ワイン ソフトドリンク カクテルから)  
(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)

住所: 大阪市西区土佐堀 1-1-6-101

電話: 06-6443-0888

ランチ: 11:30～14:00 LO

ディナー 18:00～22:00 LO

定休日: 土曜日(ランチ)、日曜日、祝日



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>